研修 | 灰屋（はんや）

2008年11月1日
2011年5月12日

2008年度後期から、「自由テーマ研究」という授業となり、学外での「峠の茶屋」制作と並行して、学内で自然素材による建築を行う場所の検討と、土による建築造形の技法研究に取り組んだ。後者に関しては積極的に研修・見学も行った。

大藪家の練り土積みによる土塀との関連で最初に注目したのは、丹波篠山地方に点在する灰屋（はんや）である。
灰屋とは、化学肥料がなかった時代に、木の枝や落葉などを燃やして黒豆などの肥料に使う焼灰を作るための小ぶりな小屋である。柱構造ではなく、竹木舞も使わず、土塊だけを積み上げてつくった厚さ30cmほどの分厚い壁でできており、屋根裏や梁も土で覆われて燃えない。現在は使われておらず、農具などの倉庫になっている。
原始的な構法で、専門家によらず、地域の農家の人々が自分たちで手づくりするので、小屋の形や土壁の構造も多様である。土の塊のような存在感や小さめのスケール感とあいまって、心に残る造形だった。
灰屋めぐりの際に訪れた丹波並木道中央公園で、有名な左官職人である久住章さんがかまどをつくっておられるのと出会った。また、建築家の畑中久美子さんがワークショップでつくられた新しい灰屋も目にした。
久住さんも畑中さんも、奇しくもこれが縁となって、その後、ワークショップやレクチャーにお呼びすることになる。（→p.39, p.81）

久住章さんには、2回目の灰屋研修（2011年5月12日）の際、詳細なガイドツアーもしていただいた。

継ぎ目を示して土塊の積み方を詳しく説明下さる久住章さん。次ページ下の写真2点も。土塊は不ぞろいの団子状のものや直方体に近いものなどさまざまだった。（2011/5/12）

背景は団子積の灰屋の壁

持ち主の方から中を見せていただく。

灰屋の内壁の様子。
練った土団子を積み上げ、その上にさらに土を塗っているのがわかる。

■学生のレポートから
・灰屋の異様な存在感（いびつな形が自然と人工の間にいるよう。
・土の粒子の大きさと水の関係。
・その土地の土がそこの風土にいちばん合う。
・科学技術ではなく資源で経済を支えるべき。
・素材について本当に熟知されている。
・"常識"について実感を伴う良識によって批判されている。
――米倉由佳（日本画3回）

研修｜矩庵

2008年11月27日
2011年11月11日
2013年12月21日
2019年12月5日

日本画家で元京都芸大教授の故秋野不矩画伯の子息・秋野等さんが住職を務める徳正寺の裏庭に、藤森照信氏が設計した茶室・矩庵がある*。
木の上に浮く空中茶室は、屋根も壁もステンドグラスの大きな曲面窓も、基本的に秋野等さん自身の施工である。秋野等さんは京都芸大陶磁器出身で、金工も木工もよくされ、ふるまって下さった煎茶の道具も照明器具もすべて秋野さんの手づくりだった。
同じく藤森氏が設計した天竜市の秋野不矩美術館の施工にも関わられたという。
随所に凝らされた工夫に興味がつきない。
矩庵はその後もたびたび研修に訪れ、豊かな造形空間から、そのつど新たな刺激をいただいている。

茶室は三つ股の栗の木に乗っているように見えるが、実際は壁側の支持でとまっている。

カーブする壁面は、竹木舞を用いた荒壁ではなく、パネル構造にラス網をはって土を塗っている。
藤森氏の一見土着的な意匠には、近代的な工法の裏付けがある。

茶室前のアーチは、ル・コルビュジエの落選したソビエトパレス案から採ったという。青々と草を生えさせたかったが、維持がむずかしいかったそうだ。

室内は外に膨らむ壁と大きな曲面窓、まろやかな仕上げで意外に広く感じる。
カーブする窓枠は削り出しとのこと。

内壁は土佐漆喰にカキ殻粉、ワラスサをこねたものを5度塗り。

コーナーには、床の間の代りにニッチが効果的にうがたれている。

壁には秋野不矩先生のデッサンがかかる。
不矩先生は90歳を越えて車イスで西アフリカに旅されたという。大地と地続きの芸術がお好きだったのだ。あらためて深い共感を覚える。

床下からはい上がる文字通りのにじり口。のち、つちのいえの土浮庵でも採用する。(→p.)

＊徳正寺は、赤瀬川原平ら路上観察探偵学会の京都での活動拠点であり、学者や芸術家が集う文化サロンでもある。